

矢作さんと英語と *American Renaissance*

川村 幸夫

早すぎる旅立ちがいまだに信じられません。よき兄であり、目指す目標であり、憧れでありました。矢作さんを語るには紙面が足りなすぎる感がありますが、特に話題を絞れば、英語と *American Renaissance* になろうかと思えます。

世間では、いわゆる実用的な英語と読みを中心とする文学研究とは、ややもすると相容れない関係であると思われているようですが、文学研究をする上でもじつはプラクティカルな英語は必須で、その素養も必要であると思えます。矢作さんに関して言えば、その両者が見事に融和していたと言えるのではないのでしょうか。

英語学習に関するテキストも数多く出版されていることからわかるとおり、英語に関しての見識もとても深いものがありました。その矢作さんからペアを組んで英語を担当するお話を頂戴したことは、これまでにないほど光栄に感じました。英語を表面的ではなく、語源にまでさかのぼって調べ上げる矢作さんの姿勢は、研究者の鏡であると言えます。この姿勢はもちろん文学研究にも当てはまることは言うまでもありません。F. O. Matthiessen, *American Renaissance* の引用文箇所（比較的短い引用箇所にはページ数が示されていません）をすべて言い当てるほど読みこなししていました。テキストに書き込み

なしで *American Renaissance* の授業をすることが喜びであったようです。矢作さんとは小泉先生の下で *American Renaissance* の授業を受けましたが、同時に机を並べることがありませんでした。また、矢作さんの指導を受けるという恩恵にあずかることもありませんでした。学生の立場で矢作さんの教えを乞うことができれば、と常に叶わぬ願いを抱き続けていました。

高知に行くことが決まった際に、知り合いがいない土地で寂しい思いをするのであろうと「休みに遊びに行きます」と言いましたら「遊びに来るとは何事か。研究成果を持ってこい」と怒られました。それから毎年夏の暑い高知で、同期の清水英之と3人で、こじんまりと、しかし、熱のこもった研究会を続けたのが、つい昨日のように思い出されます。

英語が大好きで、文学に情熱を注ぎ、家族を愛し、人を愛し、誰からも信頼され、好かれてた矢作さんが、いま身近にいないことが悔やまれてなりません。しかし、悲しんでばかりいることは、矢作さんの意に背くことになるでしょう。おそらく「そんなことばかりしていないで、ほかにやることあるだろう」ときつとおっしゃるに違いありません。私たちに残された使命は、矢作さんの遺志を継いで、英語の楽しみと文学を研究する喜びを次代に繋いでいくことであると思います。惜別。

(東京理科大学 教授)